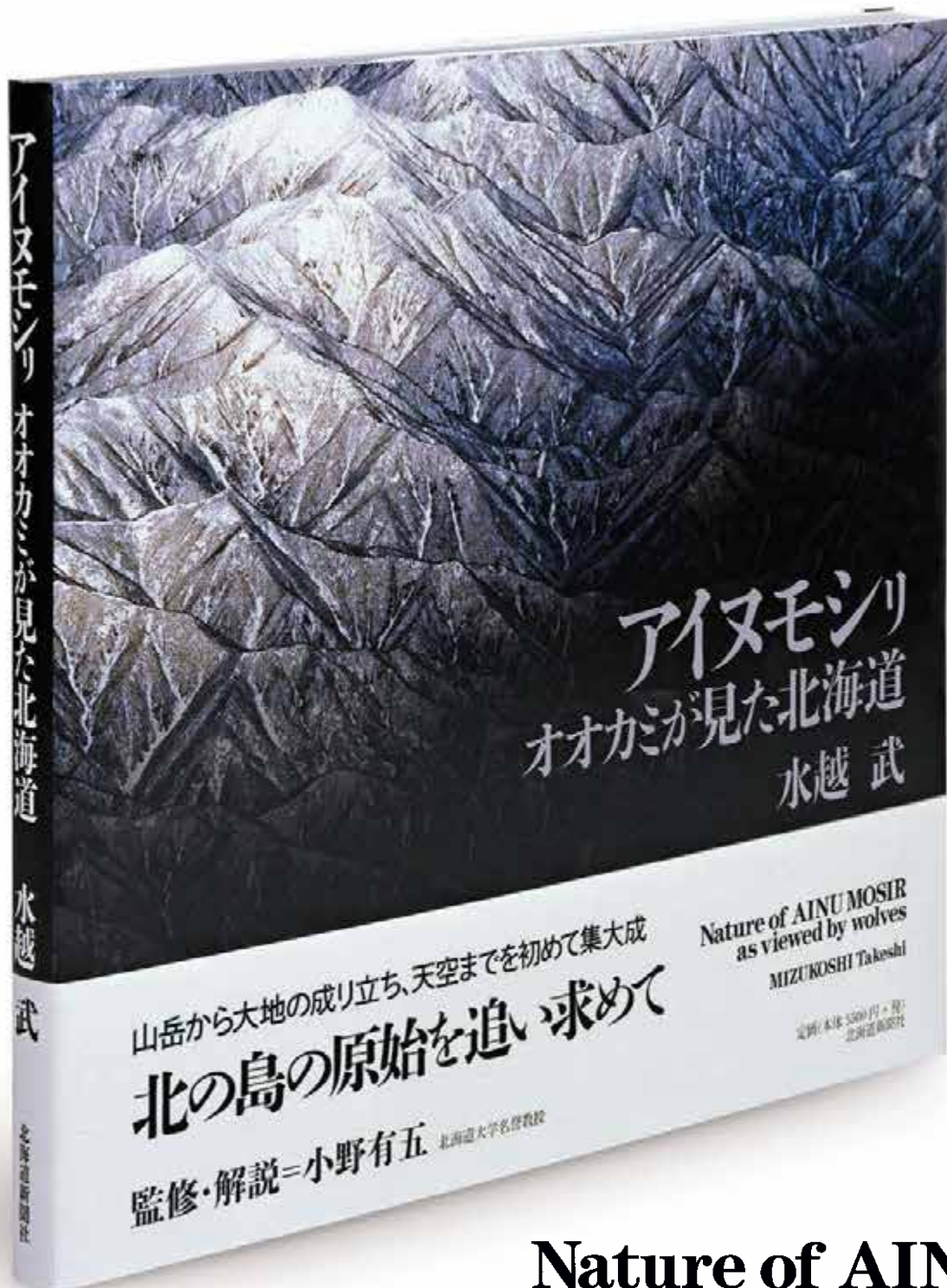




水越武写真集 [新刊発行のご案内]

アイヌモシリ オオカミが見た北海道



著者——
水越 武

監修・解説——
小野 有五

発行所——
北海道新聞社

印刷所——
株式会社アイワード

製本所——
石田製本株式会社

版画——
結城 幸司
〈表紙・本トビラ〉

レタッチ——
新納 翔
鍵谷 貴宏
(株式会社アイワード)

英文校正——
Jeffry J. Gayman
William Lee
Murdoch Macdonald

編集——
仮屋 志郎
(北海道新聞社出版センター)

装幀——
須田 照生

Nature of AINU MOSIR as viewed by wolves

MIZUKOSHI Takeshi



PRパンフレットの制作・発行=アイワード
協力=北海道新聞社

オオカミが見たアイヌモシリの世界

小野有五

オオカミたちとオオツノシカ。

オオカミたちは見ていた。最終氷期、シベリアから、陸続きになったサハリン〜宗谷陸橋を歩いて、いつの間にか、たどりついていたこの場所。同じように歩いてきた旧石器を手にしたアイヌの人々の祖先たち。その人たちが、やがてアイヌモシリ（人間の大地）と呼ぶようになるこの自然を。広大なユーラシア大陸の西から続く果てしない大草原。そこにはマンモスもいたし、毛の生えたサイもいた。野牛もいた。オオツノシカやヘラジカもいた。そんな豊かな大草原を、オオカミたちは群れをつくって走り回り、その遠吠えに怯えながら、旧石器人たちは夜通し火をたいた。

氷河期が終わり暖かくなると、サハリンと宗谷を結んでいた陸地は再び海におおわれ、マンモスもオオカミたちも、シベリアにはもどれなくなってしまった。草原にはどんどん樹木が生え、あっという間に大森林になっていった。マンモスや大型のシカは絶滅したが、オオカミたちは森の中を走り回っていた。旧石器人たちは粘土をこねて土器を発明し、森のドングリや川や海の魚、貝を煮炊きして生き続けた。

その人たちは、もうアイヌ語のようなコトバを話していた。オオカミたちの吠える声を聞いて「ウオセ　カムイ」と呼ぶようになった。その人たちは火山灰の大地に落とし穴をつくり、走っても追いつけないエゾシカをそこに落として獲っていたが、オオカミたちは猛スピードで走ってエゾシカを倒す。それを尊び、「オンルプシ（狩りをする）カムイ」と呼んだ。「ホルケウ　カムイ」というコトバもできた。

そのようなコトバを話す人たちは、オオカミたちを「カムイ」と崇め、決して近づこうとしなかった。だからオオカミたちは自由に、今はサハリンとも切り離されて島となった大地を走り回ることができた。彼らはもう、タイリクオオカミではなく、エゾオオカミになっていた。

旧石器人の子孫はアイヌの人たちになり、その人々もまた、自由にこの天地をめぐり、暮らしていた。しかし1869年、突然、その自由は、この島を植民地にした日本政府によって奪われた。オオカミたちは毒殺され、最後の一頭が息絶えたのは1900年ごろであった。

「カムイ」と崇められたオオカミたちが見た、今は「北海道」とよばれるこの大地、アイヌモシリの自然を、水越武がそのレンズのなかに探しもとめ、とらえたのがこの写真集である。

私たちも、オオカミの眼で、それを見たい。

水越武の著書『カムイの森』

『カムイの森』水越武

ONO Yugo Professor Emeritus, Hokkaido University; Geographer and Geoecologist

The Wolves had been watching. Observing the land of Ainu Mosir, as it later would be called by the Ainu people. In the Last glacial period, the wolves arrived here walking over Sakhalin and the Soya land bridge, just as the ancestors of the Ainu people had with their paleolithic tools in their hands. The wolves ran in groups over the immense grassland of the Eurasian Continent where mammoths, wooly rhinos, bison, giant deer and elk lived. The paleolithic people guarded their camps with fire, listening to the howling of wolves the whole night through. After the glacial period, the climate became warm and the land bridge was submerged again by the rising sea-levels, forcing the mammoths and wolves to remain on this island, no longer capable of returning to Siberia. The grassland was replaced by dense forests, where mammoths and giant deer could not survive, while the wolves ran amongst the trees hunting the Ezo sika deer. The paleolithic people invented earthenware by which they boiled acorns, fish and shells to survive in the new environment. They, possively already speaking words similar to the Ainu language called the wolves “Wose-kamuy”, imitating their howling. They caught the Ezo sika deer by using pitfalls which they dug in the volcanic ash covering the earth surface. The wolves running much faster than the Ezo sika deer could naturally hunt them down. People revered the wolves and called them “Onrupus (hunting) kamuy (god)”or “Horkew kamuy”. The people dared not to approach the wolves, and rather revered them as Kamuy (god) of the forest. The wolves lived freely on the lands of this island separated from Sakhalin and Siberia by marine straits, and evolved from continental wolves into Ezo wolves. Meanwhile, the descendants of the paleolithic people became the Ainu, and they also lived freely on these lands. However, their freedom was suddenly lost in 1869 with the colonizing of this island, Ainu Mosir, now known as Hokkaido by the Japanese government. Ezo wolves were killed by poisoning. The last one was found dead in about 1900. The pictures in this book were shot by the photogapher, Mizukoshi Takeshi, who tried to look for and capture the Nature of Ainu Mosir as it might have been viewed by Ezo wolves, revered as Kamuy. We wish to view them as through the eyes of the wolves.

『カムイの森』水越武

〈監修・解説〉小野有五（おの ゆうご）

1948年東京生まれ。北海道大学名誉教授。東京教育大学理学研究科博士課程修了（理学博士）。専門は自然地理学、第四紀学。地形学的研究による北海道での自然保護活動に対して第1回沼田眞賞（日本自然保護協会、2001年）、『たたかう地理学』（古今書院）の刊行およびこれまでの研究に対して日本地理学会賞、人文地理学会賞、日本第四紀学会賞（2014年）、2022年国際地理学連合より「顕著な地理学的実践」賞 2022（IGU Distinguished Geographical Practice Award 2022）受賞。

Explanation and supervision: Ono Yugo

Born in 1948, professor emeritus, Hokkaido University; major books: “Active Geography” (2014: Association of Japanese Geographers Award), “Encouragement for New Ainu-Studies” (2022); received IGU (International Geographical Union) Distinguished Practice Award 2022.

この本は、

人生でもっとも長く暮らすことになった

北海道の自然を、長年積み重ねてきた

経験を生かして改めて考察し、

見直すことを目的とした。

全体像を捉えようとすると、

すぐに突き当たる壁がある。

それは、全てを知り尽くすことはできないし、

全てを写真に捉えることも不可能である

という現実だ。その限界を私は、

生態系から俯瞰するという方法で

押し広げようとした。四季の変化が大きく、

多くの生き物たちを抱え込んだこの北の島が

どんな特徴を持っているか、

常に地球と対話しながら、

世界的な視野に立ってシャッターを切ってきた。

水越 武

（本書「あとがき」から）

水越武の著書『カムイの森』

水越武の著書『カムイの森』

水越武の著書『カムイの森』

水越武の著書『カムイの森』

水越武の著書『カムイの森』

水越武の著書『カムイの森』

水越武の著書『カムイの森』

水越武の著書『カムイの森』

水越武の著書『カムイの森』

水越武の著書『カムイの森』

水越武の著書『カムイの森』

水越武の著書『カムイの森』

水越武の著書『カムイの森』

水越武の著書『カムイの森』

水越武の著書『カムイの森』

水越武の著書『カムイの森』

水越武の著書『カムイの森』

水越武の著書『カムイの森』

水越武の著書『カムイの森』

水越武の著書『カムイの森』

水越武の著書『カムイの森』

水越武の著書『カムイの森』

水越武の著書『カムイの森』

水越武の著書『カムイの森』

水越武の著書『カムイの森』

水越武の著書『カムイの森』

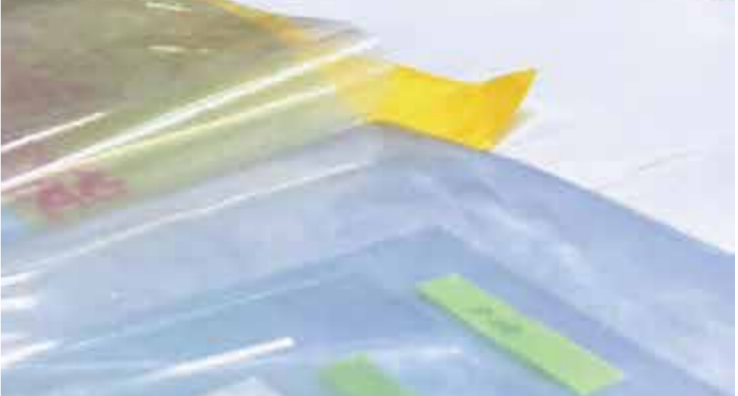
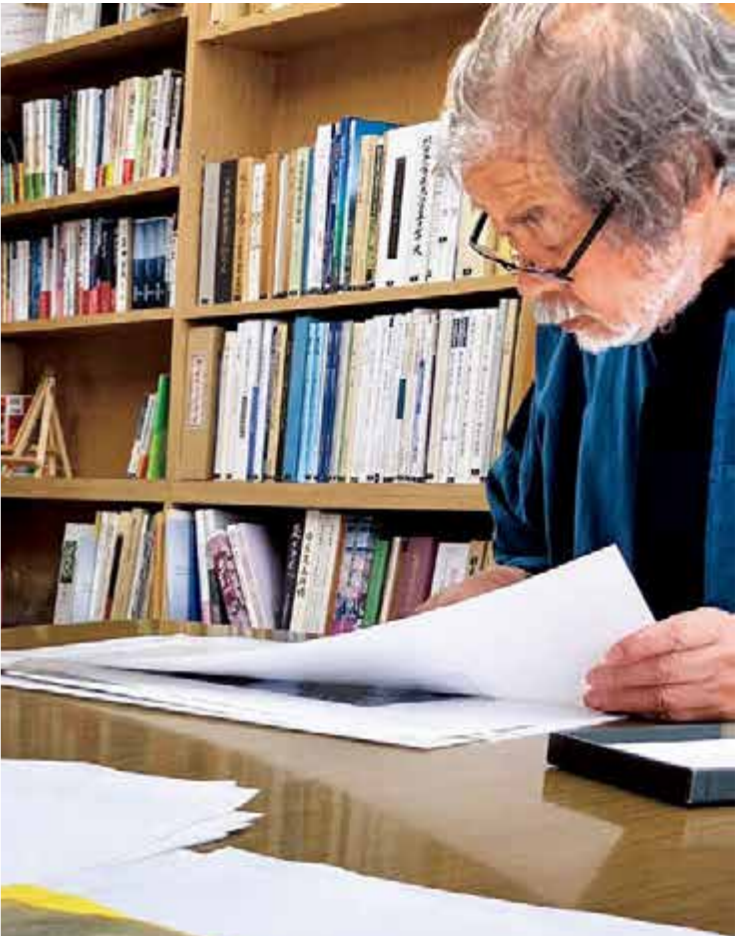
水越武の著書『カムイの森』

水越武の著書『カムイの森』

水越武の著書『カムイの森』

水越武の著書『カムイの森』

水越武の著書『カムイの森』



Author: Mizukoshi Takeshi
Born in 1938, photographing the nature centered on mountains in Japan, Himalaya, Andes, Africa and Borneo; major books: “Primeval forest in Japan” (1991: Photographic Society of Japan Award), “Forest Archipelago” (Domon Ken Award) and “Shiretoko – remained wilderness” (2004: MEXT Award for Art Encouragement).

水越武を自然写真の世界に引き入れるきっかけとなったのは高山蝶だった。日本における自然写真のパイオニアであり、最初に高山蝶にカメラを向けた田淵行男の助手を、水越は5年間つとめた。アイヌモシリにはウスバキチョウ、ダイセツタカネヒカゲ、アサヒヒョウモン、カラフトルリシジミ、クモマベニヒカゲの5種類の高山蝶がいる。このうち最初の4種は、アイヌモシリだけにしかない固有種だ。

(小野有五：第1章 山岳、解説より)

スペシャリストたちと写真家水越武。渾身の格闘から生み出された写真集

編集・校正、写真ディレクション、印刷立ち合いまで――。

制作報告：奥山敏康（株式会社アイワード）

撮りためてきた膨大な写真からのセレクト作業

水越武先生には、色に対する強い思い入れがある。そして、およそ半世紀にわたり撮り続けてきた膨大なアイヌモシリの写真作品がある。古くはコダクロームで丁寧に撮り続けたフィルムであり、近年はデジタルカメラによる撮影を展開している。

最初に編集テーマ「オオカミが見たアイヌモシリ」に基づき「10のカテゴリー」に分けて写真選択の試みが行われた。ある時は水越先生ひとりで、ある時は、編集者やプリントディレクターとともにいった。監修・解説の小野有五名誉教授のアドバイスも受けた。

インスピレーションが湧く度に水越先生は、編集の途中でなくても、カメラを携えてアイヌモシリのフィールドへ出向いて行った。その行動力には、水越先生よりも若い制作スタッフを圧倒していった。



写真選定作業は何度も行った



入念にポジフィルムをチェックする水越武先生



モニターを見ながら集団で写真を選択する

写真集の起承転結が見えてくるモニタープルーフ

アナログ写真とデジタル写真を1冊の写真集に^{こしら}合わせるには、^{あいたい}相対する条件を超越する必要がある。水越先生の色を印刷物



画面を確認しながら写真ディレクションを徹底する水越武先生と鍵谷貴宏プリントディレクター

で実現する最終の取りまとめ業務を、アイワードの鍵谷貴宏プリントディレクターが担当した。アナログ写真であるコダクロームには独特の粒状性と深み、質感がある。これに対し、撮影の段階で設定を凝らしてもデジタル写真は、撮像素子自体が広い色域と彩度をデジタル信号に変換している。

「写真は質感が求められる。カラー写真はメッセージを包含したドキュメントであらねばならない」鍵谷は、水越先生とともに全ページの写真をモニターで一緒に見つめていった。

こうして立体物として図書設計したことで「アイヌモシリの紙の造形物」が1冊に湧き立つのであった。

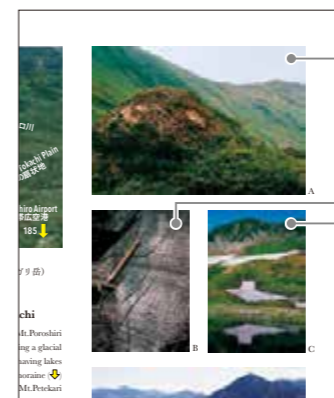


写真左：編集会議風景、右奥から、小野有五北海道大学名誉教授、仮屋志郎編集担当、須田照生装幀担当、左奥から中川信巳アイワード営業担当、鍵谷貴宏プリントディレクター
写真右：装幀の最終確認を行う水越先生（中央）

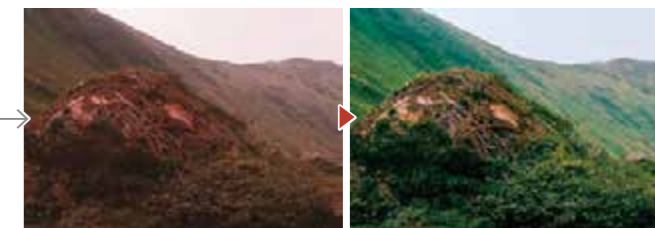
色褪せたカラー写真を復元して貴重な学術写真が甦る

山岳氷河が作り出した日高山脈と十勝平野を説明する3枚の古い学術写真がある。氷河によって丸くされた山の写真、氷河による擦痕が表面に残された岩の写真、氷河が削った岩屑を末端に積み上げた堤防状のモレーンの写真である。

このような貴重なアナログ写真は、経年劣化により褪色の危機にさらされている。学術専門出版を多く手掛けているアイワードでは、独自の技術を北海道大学及び北海道立総合研究機構との共同研究で開発し、褪色写真の科学復元専用システムを持っている。今回の編集でもその成果を如何なく発揮した。



復元写真を配置したレイアウト（部分）



褪色した写真

復元した写真



褪色した写真

復元した写真

褪色した写真

復元した写真

アナログのカラー写真には、青・赤・黄の3つ発色層がある。この各層には露光した状態の陰影を構成する色の元（カプラー）が存在するが色褪せしセピア色のカラー写真へと、変化する。アイワードの褪色復元技術は、カプラーの褪色経過をモデル化することで、元の色へ科学的に戻す技術である。それぞれ、左が褪色した写真、右が復元した写真である。

最新鋭の印刷システムを駆使して実施した立ち合い印刷



印刷に立ち合う水越武先生

アイワード石狩工場の印刷システムで、高精細カラー印刷を実施していった。世界の近代印刷のルーツはドイツ・グーテンベルグの印刷術から始まる。アイワードでは、ドイツ・ハイデルベルグ社製の最新鋭の印刷ラインでハイレベルな印刷仕上がりを保障している。



NHK札幌局のテレビ取材を受ける

コデックス装で最終の製本仕上げを実施

グーテンベルグの印刷術が普及する前の中世ヨーロッパでは、手書き用の手写本が活躍した。羊の皮をなめした^{ようひし}羊皮紙を紐で結び表紙をつけずに手書きする本を「コデックス」と呼んだ。その後、印刷技術の発達とともに



糸かがりを行う石田製本のライン

に手写本から表紙が付いた書籍へと変化し、国や地域ごとにフランス装やドイツ装のように発展していった。

本書は、書籍の原型ともいえるコデックス装を採用した。国内の製本会社のなかでも、堅牢で高品質なコデックス装製造で定評のある石田製本のラインでまとめていった。本書の造本仕様は、化学素材を極力排除したエコ仕様である。



下固めを行い、堅牢な本づくりを行う



カバーと帯をセットして書店販売用の書籍が完成する



アイヌモシリ オオカミが見た北海道
**Nature of AINU MOSIR
 as viewed by wolves**

水越 武
 MIZUKOSHI Takeshi

山岳から大地の成り立ち、天空までを初めて集大成
北の島の原始を追い求めて

監修・解説=小野有五 北海道大学名誉教授



B4 変型判 240×250%
 204 ページ
 高精細オールカラー
 コデックス装
 カバー・帯付き

お求めはお近くの書店・ネット書店にて

〒060-8711 札幌市中央区大通西3丁目6
 出版センター (編集)電話 011-210-5742 (営業)電話 011-210-5744

北海道新聞社

ご注文数	<p>アイヌモシリ オオカミが見た北海道</p> <p>ISBN978-4-86721-079-6 定価：6,050円(本体 5,500円+税)</p>	お申し込み <input type="checkbox"/> お近くの書店にお申し込みください
お名前	お電話	
ご住所		